



すみれ

令和3年6月25日

雨の降る日も楽しめる心で

園長 太田 伸男

今年は、新潟県の梅雨入りは、例年よりも遅くなっています。梅雨の末期に降る大雨により、被害が出ないことを祈るばかりです。雨が降る日は、壁や床が結露する、洗濯物が乾かない、外で遊べない等々嫌だなと感じる人が多いのではないのでしょうか。

しかし、「梅雨」という言葉には、本来、梅の実を太らせる恵みの雨という意味があります。農作物にとっては、なくてはならないものです。雨降りの日を悲観的に考えず、趣のあるもの・生活を豊かにするものにとらえてみてはいかがでしょうか。

良寛様は、次のような俳句を詠まれています。

「雨のふる日は あはれなり 良寛坊」

「あはれ」を現代語の哀れの意味で解釈すると、良寛様が雨のために托鉢に出られず、子どもたちと毬つきもできないのを寂しがっていると読み取ることができます。一方で、古語の意味（しみじみとした思いだ。趣深く感じる。）で考えると、庵の中で歌を詠み、のんびりと書を読み、筆をとるのを楽しんでいる良寛様の姿が想像されます。



以前、ラジオ番組で気象予報士が、「晴れの日が続いた後の、降り始めた雨のにおいが好きです。」とおっしゃっていました。乾いて埃っぽかった地面に雨粒が染みこんでいく時のにおいは、何とも言えないよいにおいがします。また、雨上がりには、萎れかけていた植物も輝いて生き生きして見えます。殻に閉じこもっていたカタツムリも、元気に這い出してきます。空に虹が見えた時には、何かいいことがあります。雨の日も、探してみれば素敵なことがたくさんあります。



市之瀬幼稚園では、雨が降った日も園庭や近所に散歩に出掛けます。年長5歳児は傘を差し、年少3歳児と年中4歳児は、レインコートを着て散歩します。草花や野菜の様子を見たり、傘やコートに当たる雨の音を聴いたり、葉っぱの陰で雨宿りしている虫を見付けたりします。雨上がると、カタツムリを捕まえに近所へ探検に出掛けることもあります。

自然は人間に被害を及ぼすという面もありますが、季節ごとに変化する美しく素晴らしい姿も見せてくれます。

夏休みなどで離れた場所へ出掛けた時には、子どもたちに海や山などの自然にも触れさせてほしいと思います。